

# 千曲川流域における サギ類の分布および遊動域

## Studies on the Distribution and Behavioral Area of Egrets in the Basin of the River Chikuma

上原 貴夫\*

### はじめに

本研究は、「千曲川流域におけるカラスおよびシラサギの遊動に関する研究」(1987、上田女子短期大学 児童文化研究所 所報、第9号)に続くものである。千曲川流域に分布するサギ科の鳥としては、コサギ *Egretta garzetta* (Linnaeus)、チュウサギ *Egretta intermedia* (Wagler)、ゴイサギ *Nycticorax nycticorax* (Linnaeus)、アオサギ *Ardea cinerea* Linnaeus、ダイサギ *Egretta alba* (Linnaeus)、アマサギ *Bubulcus ibis* (Linnaeus)、ササゴイ *Butorides striatus* (Linnaeus)、ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis* (Gmelin)などが見られる。これらのなかで、年間を通して多数を占めるのはコサギおよびゴイサギである。とりわけ、本研究の調査対象地である長野県上田市、小県、佐久地方における千曲川流域においてはコサギ、ゴイサギが圧倒的に多数を占める。

これらは、繁殖期には千曲川流域のいくつかの地点に群れをなして営巣し、いわゆる集団営巣地(コロニー)を形成する。現在、上田市内においては2カ所の集団営巣地が確認されている。本稿ではこれらの営巣地を中心として論考する。

---

\*Doctor of Education

## 1. コサギの分布の推移

近年、コサギは年間を通して上田市周辺の千曲川水系および塩田平方面に分布している。しかしながら、このような傾向は最近において顕著となったものである。日本野鳥の会長野支部の報告によれば、1970年頃までは千曲川水系においては目立つものではなかったといわれている。同支部の報告によれば、これまでは下記のように推移してきている。

- 1967 2～4月にかけて4回調査 } 1羽も記録されず  
'69 12月までに7回調査 }
- '75 この年12月までの5年間 個体数急激増加  
千曲川、犀川水系に周年生息  
繁殖の可能性も考えられる
- '76 7月4日調査 }  
'77 7月2日調査(部分的調査) } 冠着橋(戸倉町)―大正橋(戸倉町)間のみに出現  
冠着橋附近; '76年―2羽、'77年―10羽※  
※この10羽については戸倉町附近での繁殖が考えられた
- '77 8月 コサギとゴイサギの集団繁殖地が篠ノ井橋上流 150mの川原のヤナギ  
林で初めて発見される。(信州大学学生による調査)
- '79 上記繁殖地で繁殖が見られる
- '80 ・上記繁殖地で繁殖が見られる  
・古舟橋(上田市)下流800mの中州のヤナギ橋にてコサギ、ゴイサギ等の集団  
繁殖地発見(小林建治氏)

以上は下記資料による

調査報告書「千曲川周辺における鳥類の生息状況とその環境への影響」

調査者 日本野鳥の会長野支部, 1984, 長野県林務部

- '87 ・上記上田市地域中州にて集団繁殖が継続されていることを確認

・小牧橋(上田市)わきの泉町水源地にてコサギのみによる集団繁殖地を発見。特にここでは周年生息が見られる。

・コサギの分布は千曲川上流長野県小諸市、佐久市方面にも拡大されていることを調査。現在それは、佐久市野沢周辺の千曲川水系にまで到達している。佐久市跡部では2羽のアオサギも見られる。

#### 以上は上原貴夫調査

これらの調査を通して見るならば、少なくともコサギに関しては次第に生息数が増加してきているといえる。しかも、それは周年生息、集団繁殖へと推移するとともに、分布域の拡大という特徴をもってあらわれてきているといえる。

これらは、これまで生息してきた県外地域、とりわけ関東圏での生息環境の悪化が一因となっていることも考えられる。同時に、現在、千曲川水系においても護岸工事、河川改修が盛んであり、また、周辺の農林地の宅地等への開発が進んでいること、周辺とりわけ塩田平等に散在する池沼の埋め立てが進められていることを考えるならば、今後のこの地域での継続的生息も危ぶまれる。

## 2. 古舟橋(上田市)下流中州における生息

この地域は、1980年に集団繁殖が行なわれていることが確認されたところである(前述)。1987年における論者の調査によってもそれは確認されており、1980年以降継続して集団繁殖地が形成されていたことがうかがわれる。

ここではコサギとともにゴイサギが混在して生息している。1987年5月26日の調査では、コサギの成鳥127、ゴイサギの成鳥145、営巣数224が確認されている。幼鳥および抱卵数については詳細な観察は不能である。成鳥の個体数については、コサギおよびシラサギの両者を合計した282羽を確認したが、営巣数およびその後の調査を通じた結果から見ると、およそここに800から900の個体が生息していたと考えられる。なぜならば、1988年1月22日に現地調査をしたおりに、巣がけされたままの状態の空巣を数えた際に393の巣が確認されているからである。繁殖を終えた後の時間の経過を考

慮にいれるならば、その後落下してしまったものもあると考えられ、実際にはおそらくそれ以上の営巣がなされていたものと思われる。従って、この営巣地は、コサギ、ゴイサギが混在するものとしては県下でも最大級のものの一つとして考えられるといえる。

また、現在、この営巣地は、ニセアカシア（ハリエンジュ）を中心とした林となっている。更に、ここは千曲川の河川中ほどに広がる大規模な中州となっており、洲潟および林の成長も急であり、時折、防災上、林の伐採も行なわれているようである。そのため、現在は中州のなかほどの林に営巣をしているが以前はこれに続いた上流部で、現代は林が伐りとられた跡に最初に営巣が行なわれたことも考えられる。

また、この周辺一帯では、先の報告書によるならば、1982年1月15日の調査において上田橋―田中橋間においてコサギ118羽が数えられている。これは佐久市野沢から小布施にいたる千曲川水系において見られた最大の個体数である。しかしながら、現在はこの地域においてはこれほどの個体数は見られない。むしろ小牧橋、上田橋、古舟橋、万葉橋に多くの個体数を見る。このような移動の状況等と合わせて考えるならば、集団繁殖地も環境の変化にしたがって徐々に移動していることが考えられる。



集団営巣地（中洲）



ゴイサギ (中洲)



ゴイサギとコサギ (中洲)



同 (中洲)



コサギの幼鳥にエサを与える (中洲)



コサギ 幼鳥 (中洲)

### 3. 小牧橋(上田市)わき水源地における生息

この地域における集団繁殖は、1987年5月26日の現地調査によって最終的に確認された。ここでの繁殖はコサギのみであり、先の中州におけるコサギとゴイサギの混在による繁殖とは対照的である。ここでは、成鳥61羽、幼鳥32羽を確認した。営巣数は25であり、このうち8個の巣に幼鳥が認められた。調査の時点ではこのような個体数が数えられたが、実際にはこれ以上の個体が生息すると考えられる。

この地域は、千曲川河畔にあたる場所であり、現在、水源地として利用されている。営巣はここに植えられているアカマツ、ヒノキに行なわれている。周辺北側、西側は人家に密接するとともに、南側はJR信越線、千曲川堤防上道路に接している。このような状況であるが、営巣箇所は先の喬木に囲まれ、また水源地であるため人の出入りもほとんどなく、静かな環境が保たれている。

また、その後、1988年1月末にいたる調査によってこの場所は周年活用されていることがわかり、この点においてもこの営巣地はきわめて貴重である。先の中州におい

ては、営巣地一帯においてもコサギ、ゴイサギとも冬期にはいわゆる「ねぐら」としても利用されていない。もちろん、中州をとり巻く河川における遊動は頻繁に行なわれている。これらにおいて両者は対照的であるといえる。

ここでは、このように周年による利用がされているが、1988年1月現在の利用地点は、繁殖期における利用地点よりも20mほど北東に寄ったヒノキ林に集中している。繁殖はむしろアカマツを中心とした地域で行なわれていたのであるが、このような変化の原因は明らかではないが興味のもたれるところである。



営巣の様子(水源地)





コ サ ギ (水源地)



親鳥と幼鳥 (水源地)



(水源地)



(水源地)



巢から落下後、木をのぼってもどるところ(水源地)

#### 4. コサギの遊動域

現在、先の両繁殖地を中心として千曲川水系、上田市塩田平方面にわたって広く遊動が行なわれているが、両者についての観察から推測するならば、両者の集団を形成するコサギは、それぞれに主な遊動域を分けていることがうかがえる。すなわち、水源地を中心とする集団に属する個体は主にそれより中上流域へ遊動し、中洲を中心とする集団に属する個体は、そこを中心として下流域に遊動すると思われる。また、遊動の際には主に2～3羽で行動していると考えられる。次の図は、繁殖地域への出入りを夕暮にかけて観察したものであるが、これによると出入りの方角においてそれぞれに特徴が見られるとともに、出入りする際には2～3羽がともに行動することが多い点が見い出される。河川での採食時には、何十羽という群れ集団を見るケースが多いのであるが、少なくとも営巣地への出入りについては、先の傾向が読みとれる。

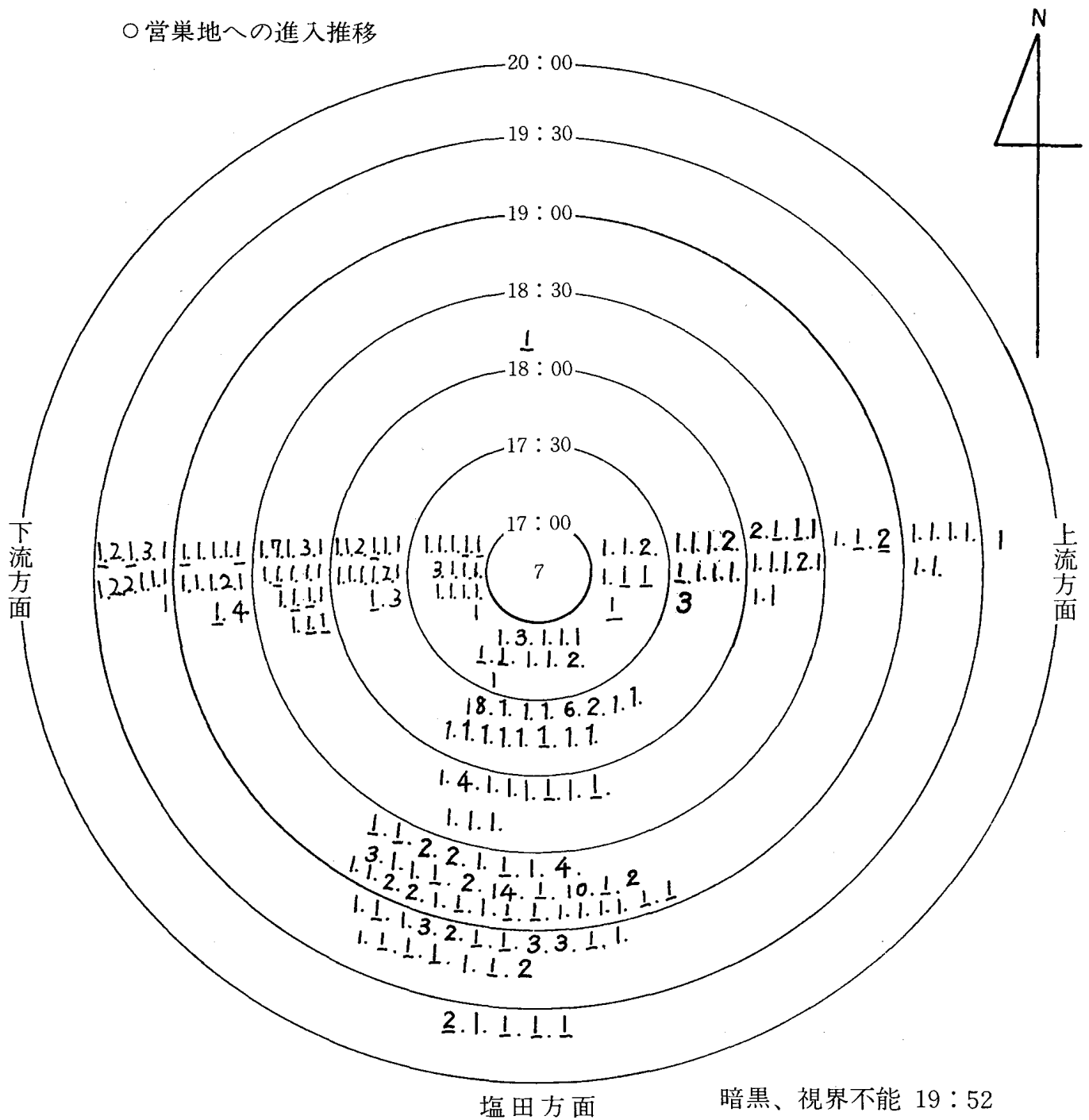
また、中洲を中心とした集団では、コサギおよびゴイサギの両者ともに塩田平方面への出入りが目立っている。当方面は田園地帯であり、中小の河川、溜池等も非常に

多い地域である。おそらく、このために採食遊動がこの方面でさかんに行なわれていると考えられる。また、この周辺一帯にこれだけの集団の生息が可能であることも、おそらくこの方面での採食地の広がりがあるためであるとも考えられる。

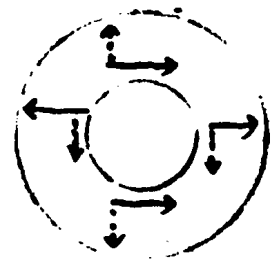
これらの点から、コサギ、ゴイサギの生息環境としての塩田平の存在はきわめて重要であるといえる。また、これら鳥類の生息にとって、その繁殖地（コロニー）における環境が重要であるばかりでなく、遊動域全体の広範な環境のあり方がきわめて重要であるといえる。このことは、野生鳥類および動物保護のあり方についても重要な示唆を与える。

1987.6.17 天候 晴 17:00 観察開始  
 場所：中州

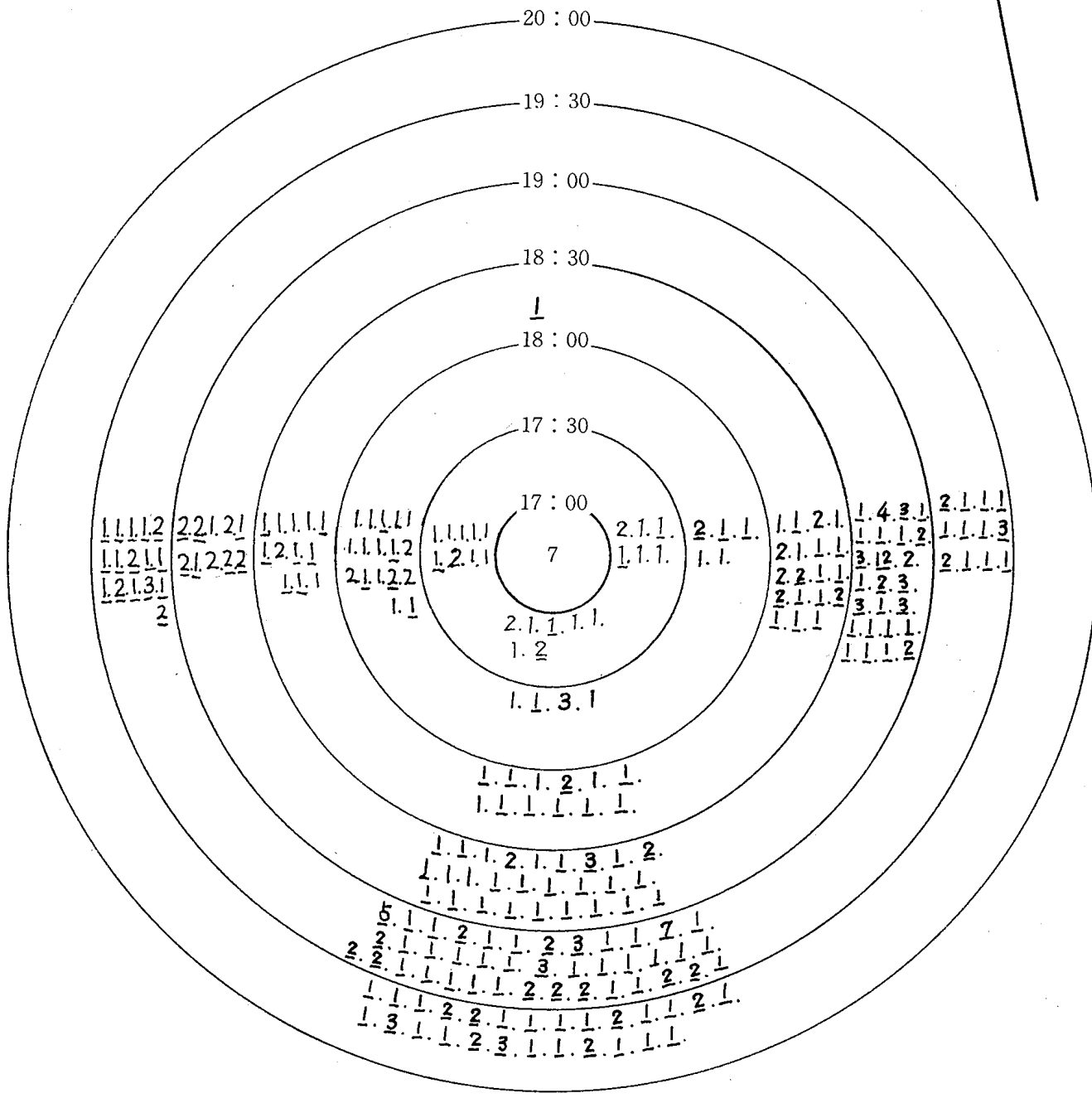
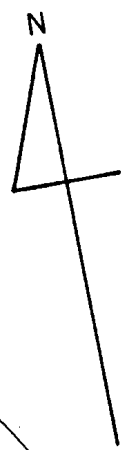
○ 営巣地への進入推移



- 図中、中心円内数字は開始時に見られた個体数
- 数字は個体数、下線つき数字はゴイサギ、他はコサギ
- 各数字の経時移行は右図、実線矢印方向より始まり、破線矢印方向へ移行
- 以後の図における位置関係は本図のとおり



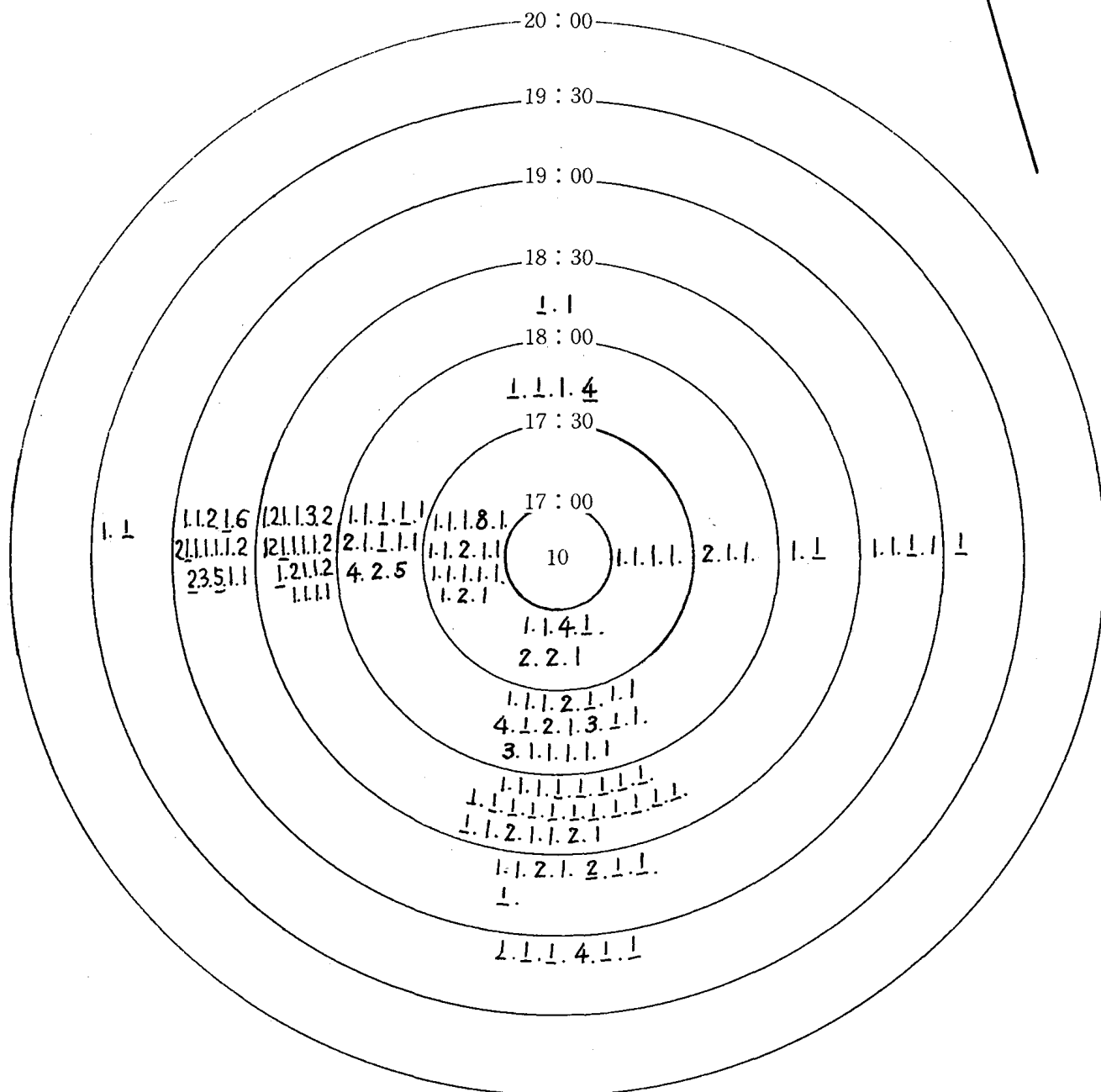
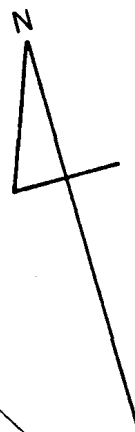
○営巣地から出た個体推移



暗黒視界不能 19:52

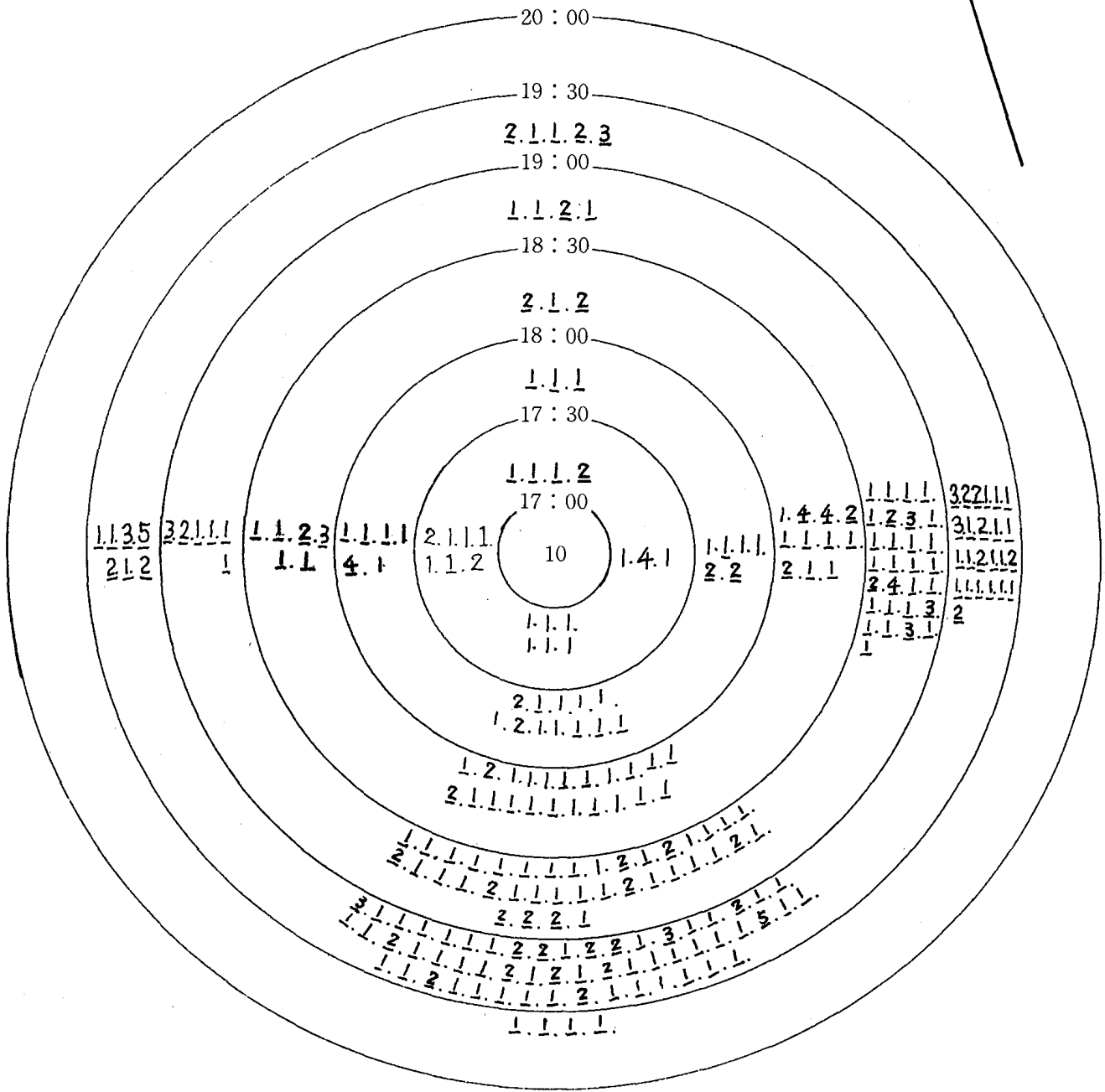
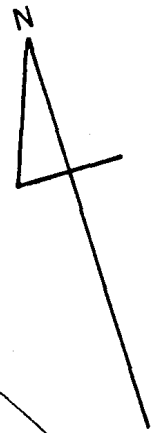
1987.6.19 天候 くもり 観察開始17:00

○営巣地への進入推移



視界不良(川霧) 19:41

○ 営巣地から出た個体数推移



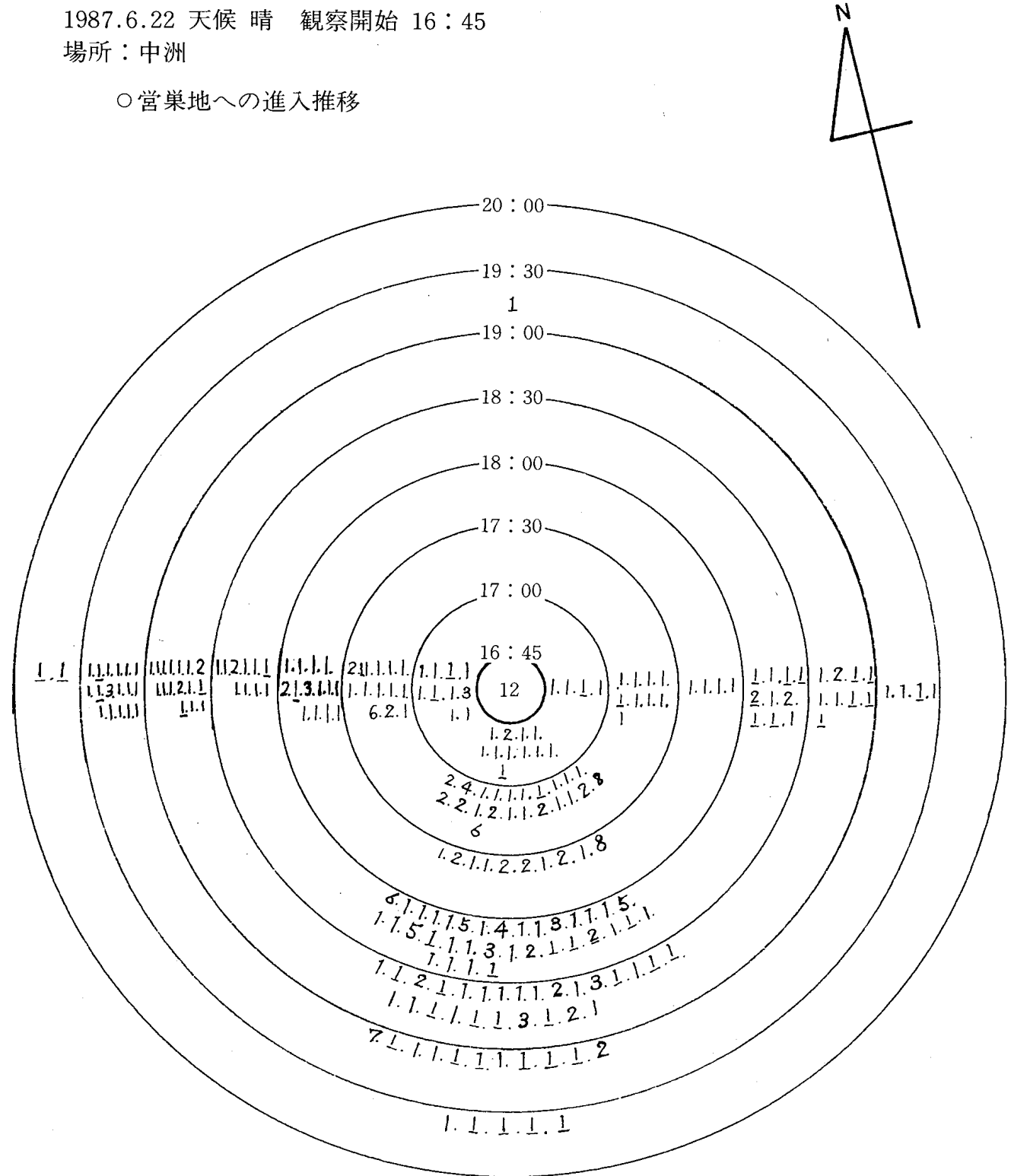
視界不良(川霧) 19:41



1987.6.22 天候 晴 観察開始 16:45

場所：中洲

○営巣地への進入推移



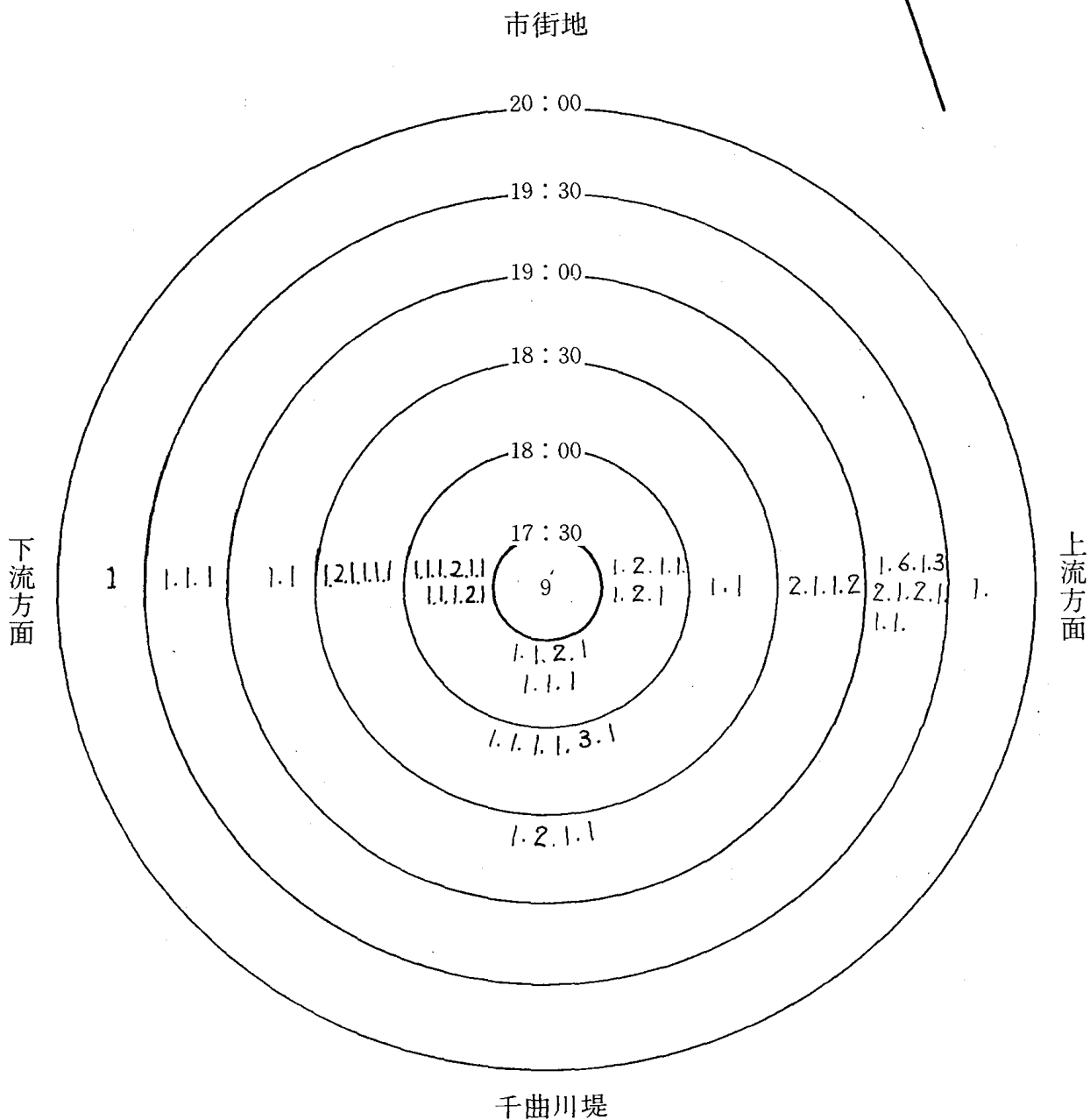
視界不良 19:56



1987.6.25 天候 晴 観察開始 17:30

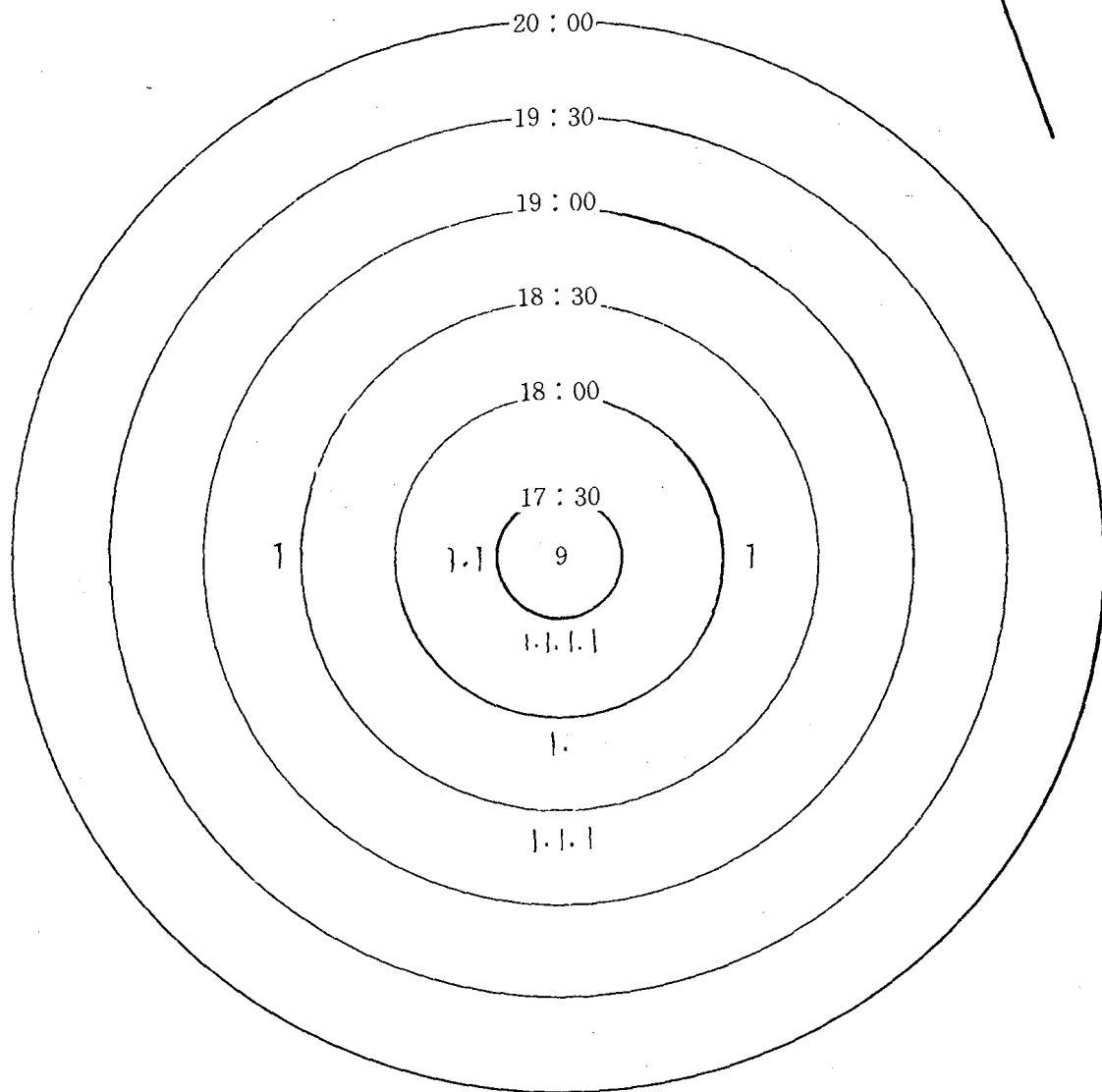
場所：水源地

○ 営巣地への進入推移



暗黒視界不能 19:47

○ 営巣地から出た個体数推移



暗黒視界不良 19:47

## 5. 総括・結語

本調査により、上田市内千曲川水系に新たなコサギによる集団繁殖地が発見された。この地域は、将来にわたって上田市における水源として活用することが予定されている。従って、この新たな繁殖地が早急に消え去ることはないと考えられる。しかし、周辺市街地における建造物密度は急速に高まっている。更に、この地域全域ではないが、将来予定されている北陸新幹線が一部地域を通過することが見込まれている。このような時点においては、この繁殖地がこのままに維持されていくことは非常に困難であると言わざるを得ない。

仮りに、この地域の環境がこのままに保たれたとしても、千曲川水系の護岸工事の進展は急である。また、上田市内外における宅地化等の波も急である。そのために、広範な周辺部までも含めた広い地域一帯での生息環境の悪化により、採食場所を失ない、営巣適地を失ない、生息そのものが難かしくなることが予想される。コサギ、ゴイサギばかりでなく、他の野生生物にとっても良好な自然が保たれることが望まれる。

現在、千曲川水系は野鳥の宝庫ともいえるほどに豊富な鳥類が生息している。なかには貴重な鳥類も含まれる。また、行動形態から見て貴重な生態を示しているものも見られる。コサギについて見ても、今回発見された繁殖地は周年活用されていると考えられ、このような繁殖地は長野県内においてはとりわけ貴重であるといえる。また、二つの集団繁殖地が近接して維持されていることは、コサギの繁殖形態ばかりでなく、群れの構造や遊動域の解明などについても多くの示唆をもたらすものであり、学術上からも貴重であるといえる。

(本学助教授・教育学博士)